次郎長三国志

村上元三

次郎長三国志

発行 昭和四十六年十二月二十日

定価 五八〇円

著者 村上元三

発行者 桜井文雄

発行所 広済堂出版

東京都千代田区飯田橋
2－4－3日吉ビル4F
電話 〇三－二六三－〇七八一（代）
振替 東京一六四二二七番

印刷所 桜井広済堂

© 1971 村上元三

0093-000600-2230

次郎長三国志

目次

桶屋の鬼吉　五
関東綱五郎　二三
清水の大政　三六
法印大五郎　五四
増川の仙右衛門　七一
相撲常　八七
大野の鶴吉　一〇二
森の石松　一一九
追分三五郎　一三七
投げ節お仲　一五四
三保の豚松　一七一

小川の勝五郎　一八九
森の八五郎　二〇八
形ノ原斧八　二二八
小松村七五郎　二四五
七栗の初五郎　二六二
小松村お園　二七八
清水の小政　二九六
二代目お蝶　三一五
神戸の長吉　三三五
吉良の仁吉　三四八
天田五郎　三七三
神田伯山　三九一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀・扉　宮永岳彦

桶屋の鬼吉

山ばくち

太い眉と眉の間がくっついて、そこが出っ張っているので、眼が引っ込んで見える。切れ長の細い眼なので、おとなしそうな感じがする。鼻はあぐらをかいて、への字になった唇は、ひどく大きい。年は二十五六だろう。背は大きいほうではなく、それが木綿の粗末な着物で、長脇差を右手に逆にさげて、

「遊ばせてもらわずか」

駿河なまりの太い声で、百姓じみたものの言い方をしながら、客のあいだに割り込んできた。

あまり風采はあがらないし、見たこともない顔なので、馬定は気にもせずに、

「堅気のお客様が遊んでいなさるのだから、無職は遠慮してもらいてえ」

横柄な口のきき方をした。

「さようですか」

その男は、おとなしく引きさがっていったのはいいが、三間盆の畳から五六間はなれた松の根元に腰をおろし、煙草入れを出しながら、壺振りの手元をじろじろ眺めはじめた。強い陽ざしの中で、細い眼をよけい細め、口のあたりに薄笑いを浮べているが、へんに馬定には気になった。

「どこの野郎だ、あいつは」

そばにしゃがんでいる乾児の辰平に小声で訊くと、

「森の爺いのところに草鞋をぬいでる三下奴でさあ。清水の長五郎とかぬかしたが」

上の空でそう答えたきり、辰平は、

「さあ、張ったり。張ったり」

血眼になって、客へ声をかけている。

森の爺いというのは、森の五郎のことで、東海道掛川から、東は大井川の岸の金谷、西は見附、北はこの秋葉山の麓の犬居あたりまで縄張りにしている親分で、馬定のように半分は空巣ねらい同様に、人の眼を盗んで賭場を開いて歩く男には、気味のいい名前ではない。

馬定としても、二十四日の秋葉寺の縁日に当て込み、二

の鳥居から一丁ほどのぼった子安地蔵のうしろ、三方を杉林に囲まれ、からりと前のひらいた小山で山博奕をひらいたのも、森の五郎には一言の挨拶もなしにやっていることなのだった。

この渡世からいえば、もぐり博奕であり、どう森の一家から言いがかりをつけられても言いわけの出来ることではない。

だから馬定は、二の鳥居から下の一の鳥居、麓坂上村、天竜川の上流を舟で渡って犬居に至る間の要所要所に見張りを立て、森の一家のなぐり込みを警戒している。森までは、六里十五丁あるので、用心さえしていれば、そう簡単に不意をつかれる心づかいはなかった。

こういう山博奕も、たった一日で、やりようによっては三百両から五百両という場銭があがることもあるので、いのちを張っても、儲けからいえばこたえられないことになる。

馬定という男も、筋の通った親分から盃をもらって修業をした、というような男ではなく、東海道で稼いでいた馬方あがりで、力が強いところから、いつの間にか乾児も増え、馬定一家などと称してはいるが、ごろつき同様の男だった。ここで一日、山博奕をやって場銭をかき集めてから、森のほうへは降りず、北へ抜けて熊石打、鳳来山と、いわゆる鳳来山道を御油へ逃げる、という目算を立てていた。

山博奕は、野天博奕の中でもいちばん荒っぽい方法で、畳を六枚ほど運んできて、二枚ずつ合わせて鋸を打ち、三間盆というのを作る。正面に壺振りが、壺皿と賽ころを持って立膝をし、張り方は丁半に分れ、畳には乗らずに地面にしゃがんでいる。張るのは現ナマで、勝負は手っとり早い。賽ころは一寸角の鹿の角、壺皿は、底の深い目籠に紙を張り、渋を塗ってある。

「さあ、張ったり張ったり」

畳の端にいる若い者六人ほどが、さかんに張り方へ声をかけ、目玉をきょろきょろさせている。

馬定は、壺振りのなめうしろに床几を構え、ひどく納まった顔つきで腰をおろしているが、いくら親分ぶっていても、人相が悪く、顔に傷あとのある四十五六の男で、貫禄などというものは少しもなかった。乾児は、全部で十二三人、博徒というよりも、めいめい山賊の手下といったほうがいいくらいの面構えをしている。

客は、今日の縁日に秋葉山へ参詣にきた人たちで、商人もいれば、職人と思われる男もあり、百姓風の五六人連れもまじっていた。

よく晴れた春の空を、白い綿雲が、ゆっくりと流れている。山頂のあたりに、かあっと陽が照りつけて、あざやかに社殿が浮いて見える。

だが、この山博奕場だけは、欲と同行二人の男たちが、血眼になって勝負を争い続け、金がなくなると、しまいに着物まで脱いで賭けようとする男がいた。

それは、まだ二十二三の、旅ごしらえをした若い男で、腰には長脇差も差していない。たくましい身体つきの、背の高い男で、坂田の金時のように顔が赤く、鼻の大きな、眉毛の太い精悍な面がまえだった。しゃべることばも動作も、ひどく威勢がいい。

すってんてんになったと見え、立ちあがって、くるくるっと着物を脱いでしまい、

「ええ、こうなったら、一か八かの勝負だえも」

尾張なまりで啖呵を切ったと思うと、それを丸めて盆の上へ叩きつけた。

「これで丁に一分張った」

いい身体をしている。肥っているほうではないが、両の腕や肩など、こりこりと肉が盛りあがって、叩けばいい音がしそうだった。

「着物ではなんねえ。金で張ってくれ」

馬定一家のひとりが、その若い男へ邪慳にどなりつけた。

「残らずはたいてしまったから、頼むでえも」

と若い男は、顔を真ッ赤にして言ったが、

「だめだ、だめだ。あとで草鞋銭ぐれえくれてやらねえものでもねえから、そこらに突っ立ってろ。さあ、張った張った」

頭から無視され、その若い男は、むっとしたらしいが、着物を抱えると、盆のそばから立ちあがった。

その姿を、清水の長五郎は、口をへの字に結んで、煙草をくゆらせながら、松の根元に腰をかけて眺めていた。

「おう、若えの」

と長五郎は、前を通る裸の男に呼びかけて、

「いくら取られたね」

「三両と二分、ほかに一朱と百三十二文」

「ずいぶん細かく取られたな。これに懲りて、もう博奕などやらねえがええずらよ」

「そうは行かねえだい。一人前の博奕打になって帰る、と親父に約束をして出て来たでなも」

「つまらねえ約束をしただの。おめえ、どこの生まれだ」

「尾張名古屋の者で、家は桶屋、名は吉五郎。あんまり乱暴をやるで、鬼吉という綽名があるでえも」

「ますますよくねえな」
「なあ、お前さんも博奕打と見えるが、ここにいる手合いの仲間か」
「いいや、おれは駿河の清水の生まれで、名は長五郎、人からは次郎長と呼ばれている駈け出し者だに」
「それなら、おれのこの着物、一分で買ってくれめえかなも」
「いかさま博奕に、いくら張ったところで無駄だ。よしたほうがええ」

男の約束

「なにっ、あれはいかさまか」
「大きな声を出しちゃあいけねえ」
と次郎長は、にやりと笑って、
「客の中に、香具師の符牒でいうサクラが三四人はいっている。丁と半とかわるがわる張ってはいるが、壺振りが壺をあけるとき、右の小指の先で、賽ころを動かしているだに」
「そうか、あん畜生」
「だから、素人がいくら張っても、儲かりっこはねえずらよ」
「それをおめえ、黙って見物しているのか」
「なあに、潮時を見ているのだ」
次郎長は、にやりと笑って低い声で、
「いまここへ、森の五郎親分の一家がなぐり込んでくる。いわば、おれは見張り、それまでのつなぎだに。喧嘩が始まって、巻き添え食ってはなんねえ。これをやるから、早く山をおりな」
紙入れの中から一分金をつまみ出して渡そうとしたが、鬼吉は眼もくれずに、
「いかさまに引っかかって、三両二分一朱と百三十二文巻き上げられたとあっちゃあ、男が立たねえ。親父のところから、黙って持ち出してきた金だ。取り返さねえでおくものか」
「やい、どこへ行く、喧嘩をするのは、おめえの役じゃあねえ」
「そっちとこっちは別だえも」
どなると一緒に、鬼吉は、裸のまま駈け出すと、壺振りの正面から、いきなり三間盆の上へとび上がった。
「やい、こいつらあ」
「な、何をしやがる」
総立ちになった馬定一家へ、鬼吉は、抱えていた着物を

振り廻しながら、
「よくもいかさまをやりやがったな。三両二分一朱百三十二文、返しゃがれ」
「賭場荒しだ、この野郎、叩っ斬れ」
と、馬定は立ちあがって、脇差を抜いた。
喧嘩っ早くて綽名は鬼吉、と自分でも言うとおり、こういうことになると、ひどく張り合いを感じるらしい。見る間に身体中が真っ赤になり、眼がいきいきしてきて、
「勘弁ならねえ。手前ら、そこへ積んで火をかけてやるから覚悟しろ」
脇差を抜いて斬ってかかる馬定一家の二三人を、着物で叩き伏せ、蹴倒した。
張っていた客たちは、わあっと悲鳴をあげて逃げ出し、場銭を集めようとする馬定身内の若い者は、鬼吉に踏んづけられて、ぎゅっと声をあげた。
よほど喧嘩の要領には長じているらしく、鬼吉が十何本の脇差の切先一つ、身体に触れさせず、びゅんびゅんと着物を振り廻して暴れているところへ、清水の次郎長が、
「仕方がねえ。黙って見てもいられねえで、助太刀をしてやらざあ」
長脇差を抜いて走り寄ると、二三人の小手や太股に浅く斬りつけ、馬定へ迫った。二間ほど追いまくってから、
「さあ、早く逃げるんだ」
鬼吉の手をつかんで、どんどん走りだした。
「おらあ逃げるのはいやだ」
鬼吉は、わめき立てたが、次郎長の強力でつかまれた右手を振り放すこともできず、そのまま引きずられるようにして、山の上から杉林の間を縫って走りおりた。
やっと二人が、一の鳥居を走り抜けて、坂下村へ入ろうとすると、森の五郎一家の男たちが十人ほど、馬定の乾児を捕えにやってくるところだった。
「どうしたね、次郎長さん」
森の一家の者たちは、抜身を手にしたままの次郎長と、下帯に腹巻一つの男を見ると、びっくりして声をかけた。
「どうもこうもあらすかい。様子を見ているうちに、この若えのが、馬定へ喧嘩を売ったでよ、大騒ぎになったに」
「そいつはことだ。逃げねえうちに馬定をとっ捕まえにゃあ」
森の一家の男たちは、馬定の乾児を追いやって、どんどん山のほうへ走っていった。
次郎長は、改めて鬼吉を見直すと、
「おれも無法者で、そのため清水にもいられなくなった男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だが、おめえもたいした野郎だの。その塩梅では、望みどおり博奕打になるよりほかはあるめえ。さあ、金をやるから、これで着物を買うがいい」
「うん、おめえさんに助けられたのだからえも、このいのち、おまえさんに預けるで」
「そう大仰に恩に着ることはねえ」
「ついでに、おれを乾児にしてもらいてえが」
「おれあ乾児を持てるほどの男ではねえ」
「いいや、おれを博奕打になれると見込んでくれたのは、おめえさんがはじめてだで、どうでも盃をもらいてえ」
むきになって、鬼吉は言い張った。
次郎長も、苦笑いをして、
「仕方がねえ。森の五郎親分のところへ、清水の次郎長といって訪ねて来い。盃をやるやらねえは、そのときの話次第」
「男の約束だえも」
「判った、判った。さあ、早く逃げろ。秋葉のお山で喧嘩をやったのだから、見つかったら、ただでは済まねえぞ」
「うん、それでは親分」
「まだ早えわ」
次郎長が見送っていると、鬼吉は、裸のまま雑木林をくぐって走っていった。
そのまま次郎長も、五里の道を急いで、夜になったころ、森の町へ帰っていった。
掛川から北へ三里、太田川に近い町の入口に、五郎の家がある。秋葉の道者宿も兼ねた大きな家で、森の在の谷口村に田畑を持って豊かに暮しながら、博奕貸元もしている五郎は、世話好きなので、旅人のあいだでも評判がよかった。もう六十をとうに越え、顔に皺こそ少ないが、陽焼けのした、そこらの百姓親父と変らない外見をしている。
「そいつは、まずかったな」
次郎長の話を聞くと、五郎は、べつにあわてる風でもなく、
「おれがお前さんに、先へ行って見張りをしていてくれと、頼んだのは、先方にあまり顔を知られていねえと思うからだ。うちの奴にも、白刃を抜いちゃあいけねえ、おどかして山から北のほうへ追い出せ、と言いつけてやった。というのは、あすこは明神様のお山だからね」
「申訳がございません。その責めは次郎長が負います」
「そうも行かねえ。ともかく、おめえさん、明日の朝にならぬうちに、ここを発って清水へ帰んなせえ。もう三年前の喧嘩のほとぼりも冷めていることだろうからね」

と、五郎にすすめられて、次郎長も、その気になった。
次郎長が、故郷の清水を飛び出してから、この弘化二年の春で、丸三年になる。
次郎長は、清水港の船持船頭雲見ずの三右衛門の三男に生まれ、三右衛門の義弟の、米屋の次郎八のところへ養子になり、次郎八のところの長五郎だからというので、次郎長と呼ばれた。子供のときから手のつけられぬ乱暴者で、養父のあとをついだ米屋の店をつぶしてしまい、巴川の岸で博奕打と喧嘩をして、対手の二人を殺し、次郎長は旅へ出た。
兄貴分の江尻の熊五郎、弟分の庵原の広吉の二人も同行して旅を続けるうち、三州西尾の東、吉良の浜で、半分は博徒の親分、半分は、剣術使いの備前浪人小川の武一という男のところに草鞋を脱ぎ、みっちりと剣術を学び、その一方で寺津の治助という親分のところへ通って、博奕打としての修業も続けた。
機が来て清水へ帰ったところで、もう堅気になれるわけのものでもなく、一生を博奕打で通そう、と決めてかかると、やはり性に合っているのか、次郎長は、剣術のほうの腕もあがり、博徒としても三州で名が通るようになってきた。
熊五郎も広吉も清水へ帰ったあと、次郎長は旅を歩いて、森の五郎のところに足をとめてから、もうこれで三カ月になる。
「どうもご厄介になりました」
あくる朝早く、旅支度をした次郎長が、五郎の居間の敷居外で挨拶をすると、
「お前さんは向う見ずだが、腹の大きなところがないでもねえから、まあしっかり修業なさることだ。だが、博奕打というのは、人間の表稼業にはねえ渡世、いわば外道の世界だ。素人衆に迷惑をかけぬよう、心掛けなさるがいい」
「ありがとう存じます」
五郎から餞別をもらい、あくる日、そっと清水へ帰って様子を聞くと、三年前、自分が巴川べりで殺したとばかり思っていた小富と武五郎という二人の博奕打は、死んだのではなくて、喧嘩のあと二カ月ぐらいして傷が癒ってから、旅へ出ていったという。
ほっとしたが、もう美濃輪にあった米屋の店も人手に渡してしまったし、姉婿の甲田屋も、博徒姿になって帰った次郎長を見ると、いやな顔をして、あまり立ち寄らないでくれ、と頼む始末だった。
住むところもないので、仕方がなく、兄弟分で身体の大

きなところから大熊と呼ばれる江尻の熊五郎のところへ頼って行くと、
「よく帰ってきてくれたっけよ、次郎長」
と、熊五郎は喜んで、
「お前がいさえすりゃあ、百人力だで。まあ、今夜は一杯飲もう」
そう言って次郎長を、江尻の寿々屋という料理屋へ連れていった。
佐平、富五郎、武次などという熊五郎の乾児と一緒に押し上がっていった次郎長を見ると、寿々屋の亭主や女房は、
「おや、次郎八さんとこの長五郎さん、いつお帰りで」
表面はちやほやしながら、腹の中では、うんざりしている様子だった。
清水から江尻へかけ、乱暴者で鳴らした次郎長だけに、旅へ出ていた三年のあいだは、どこでもほっとしていたに違いない。

寿々屋のお千

「兄貴、おらあ酒をやめたでよ」
寿々屋の二階座敷へ坐ってから、次郎長は、熊五郎こと通称大熊が盃をさした時、改まった形でそう言った。
「へええ、一升酒をのんでたお前がか」
呆れた顔をする大熊へ、次郎長は、
「おれあ以前、酔っ払って歩いてるところを闇討ちくって巴川へほうり込まれたこともある。また、三年前の喧嘩も酒がもとだ。博奕打になると肚を決めた上は、これから先いのちを張ることがいつもあると思わねばならねえ。酒でしくじりをしねえためには、酒をやめるにかぎると思い、こんどの旅でもおれは、一滴も飲まねえで通したでよ」
口をへの字にしたまま、薄笑いをしているが、一たん言い出したとなると、てこでも動かない次郎長の気性を知っているだけに、大熊もあきらめて、
「仕方がねえ。では、おれっちだけで飲まざあ」
乾児たちにそう言い、次郎長は湯呑で茶をのみながら料理を食いはじめたところへ、寿々屋の亭主平太郎とお夏の夫婦が、養女のお千を連れ、改めて挨拶にやってきた。こうしないとあとがうるさいと思ったからだが、次郎長は、それほど自分が土地で嫌われているとは思ってもいない。
「おう、お千ちゃんか。大きくなったっけなあ」
次郎長が声をかけると、夫婦のうしろへ隠れるようにして、お千は挨拶をした。
三年前までは、まだ子供に見えていたお千が、びっくり

するくらい娘らしくなっている。小作りで、色は白いというほうではないが、眼のきれいな、すうっと鼻筋の通った顔立ちで、無口なのでおとなしそうに見えるが、根はしっかりしている娘だった。

「さあ、そばへいって酌をしてあげろ、と言いてえが、次郎長は酒をやめたというでよ」

と大熊が笑うと、次郎長は、しげしげとお千をながめながら、

「そういえば大熊、おめえの妹も、お千ちゃんと同じ年ごろだっけの」

「お蝶のほうが、一つか二つ上だろう。和田島の爺つあんのとこへ奉公にやってあるでよ」

「そりゃあいい。おれも明日、改めて叔父貴のところへ挨拶に行くつもりだ」

和田島の太左衛門というのは、江尻の辻町に住んでいる貸元で、次郎長の実父三右衛門の弟に当る。温厚で、博徒には似げなく喧嘩ぎらいな男であり、次郎長には苦手だった。

しかし、清水へ帰ってくれば、巴川をへだてて目と鼻の先の太左衛門のところへ、顔出しをしないわけにもいかない。

「では、ごゆるりと」

平太郎夫婦が引き下がろうとしていると、階下で何か言い争う声が起った。続いて、人の引っぱたかれる気配がして、すさまじい怒声が聞えてきた。

「やい、次郎長は来ているか。男の約束を破った野郎、ただは置かねえ。桶屋の吉五郎を忘れたか」

どかどかと荒っぽく段梯子を踏み上がる足音が聞えた。

びっくりしたお夏が、唐紙をあけたところへ、我から綽名を鬼吉と名のった、あの尾張の桶屋吉五郎の顔が、ぬっと現われた。

「いやがったな。やい、次郎長」

と鬼吉は、あわててさえぎろうとする平太郎夫婦を突きのけ、座敷へ躍り込んできた。

お千は逃げ場を失い、座敷の隅に小さくなった。

「何をするだい、この野郎、たたきのめせ」

大熊の乾児たちが突っ立つのを、次郎長は、

「まあまあ、おれに任しておいてくれ」

押えておいて、坐り直した。

「おう、次郎長」

その前に、鬼吉は、ぴたりと膝をそろえ、おそろしい顔をして睨みつけた。長脇差こそ持っていないが、旅姿のま

まで、草鞋を脱ぎもせず、次郎長の返辞次第ではつかみかかろうという気構えだった。
「おめえは、なぜ男の約束を破った。おれを乾児にするといっておきながら、どうして森から黙ってここへ帰ったんだ。おれあ森の五郎親分に会って、すっかり話は聞いたでなも」
「まあ待て、あの時の約束は、おめえのほうの一方ぎめ。はっきり乾児にすると言ったわけではねえ」
「言いわけは聞かねえ。さあ、親分になってくれ。おれが頼んだで、どうしても男の約束を守ってもらいてえ」
「勝手なことを言う野郎だ。親分になってくれなどと言われても、おれは清水へ帰ったばかりで、住む家もねえ。乾児を持つどころであらすかい」
「家のある無えは、おれの知ったことでねえ。さあ、男の約束、どうしてくれる」
「呆れ返った無法者だ」
腹を立てる気もせず、次郎長が苦笑いをしていると、黙って眺めていた大熊が、そばから口を出した。
「長さん、おれでさえ乾児を五人や六人は持っているのだに。これから売り出すお前が、乾児の一人ぐれえ持っていても不思議はねえ。見れば、ひどく威勢のよさそうな男だし、無鉄砲ではおめえに似合いの乾児らしい。ここで盃をやったらどうずらよ」
「お前さんは話がわかる。さあ、盃をくんねえ」
と、鬼吉が気負い込んで、膝頭をぴしゃぴしゃたたいた。
考えていた次郎長も、しばらくして、にやりと笑うと、
「仕方がねえ。男の約束を守らねえなぞと言われては恥だ。盃をやらすか」
と言ったとき、それまで鬼吉を睨みつけていたお千が、部屋の隅に立ったまま、ぴりっとするような声をかけた。
「もし、そこの若い人。ここは土の上じゃあないんですから、草鞋を脱いで下さいな」
「何をっ」
かっと眼をむき、お千を見上げた鬼吉の顔に、どうしたのか、急にぱあっと赤味が増した。
「な、なにを言うでえ。娘っ子が」
突っ立ち上がると思いのほか、口の中でぶつぶつ言いながら鬼吉は、神妙に畳の上で草鞋を脱ぎ、今さらのように泥足でよごれた畳を振返って、手拭で拭きはじめようとした。
「掃除は、こっちでします」
と、お千が続いて、ぴしゃりとやりこめた。

「それより先に、盃というのを貰ったほうがいいでしょう」
「へい、済んません」
今まで次郎長へ猛烈に食ってかかっていた鬼吉が、人が変ったようにおとなしくなり、しょげ返って坐り直した。

猫の恋

「ねえ親分、お千ちゃんといったっけね。あの娘は、親分と何かわけでもあるのかえも」
次郎長から盃をもらい、第一番目の乾児になって、どこへ行くにもついて歩くようになってから、桶屋の鬼吉は、ひどく真面目くさった顔つきで、そう訊いた。
「訳なんか何もねえ。小せえ時、よく苛めて泣かしてやったことがあったっけよ。それだけのことだが、お千がどうかしたか」
「いいや、向うはどうもしねえが」
「へんだな、お前」
「へえ、おれも自分でそう思ってます」
「お千に惚れたのか、お前は」
「そうじゃあねえでしょうかなも、親分」
「おれに訊く奴があるか、馬鹿野郎」
「おれはねえ、親分。喧嘩するときと、それから火事を見たとき、ぱあっと、こう身体ん中があたたかくなって、ひどくいい心持がするだが、お千ちゃんの顔を見てると、それとおんなじで、身体がぽかついてなんねえ」
「女のことなど考えるより、男をみがく修業をするんだ。親分のおれでせえ、まだ住む家もなく、一人前は遠いだでよ」
「へえ、済んません」
三河の吉良の武一のところや、寺津の治助の家などでは「清水の客人」とか「次郎長兄い」などと呼ばれ、大事にされていたが、清水へ帰ってみると、次郎長にとって頼りになるのは、江尻の大熊と叔父の和田島の太左衛門しかいなかった。
姉婿の甲田屋や、実父や養父などのほうの堅気の親類たちは、次郎長の無法ぶりにさんざん手を焼いていただけに、敷居をまたぐのさえいやがるし、また次郎長にしても、森の五郎にいわれた言葉もあり、そういう堅気の親類たちに迷惑をかける気はない。
大熊の家にごろごろしていたり、太左衛門の博奕場へ行ったり、なんとか清水に腰を据えるだけの金を作ろうとしたが、二カ月ぐらいたっても少しもいい目が出ず、博徒仲間で星という借金が山のように出来てしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com